

becoming is being が示す現在進行形の表現をするが、これは、『大乘起信論』による空理解から生れた表現であると考えられる。『大乘起信論』では、一心二門で、衆生心に焦点を当て、衆生心が悟りに向う過程を具体的に示している。一心二門とは、不生不滅と生滅に二つの心が衆生にあると言う。言い換えれば、我々の心には、絶対普遍的な心と相対的にはたらく心とが同居しているということであろう。不生不滅と生滅との和合を阿梨耶識として、そのはたらきを熏習として表現する。熏習のあり方には二面が示される。衆生心である執着心がはたらくと、ますます執着が強くなる。逆に、真如がはたらくと、心の中に絶対真理である悟りが立ち現われると説く。執着がはたらく熏習を染法熏習といい、真如がはたらく熏習を浄法熏習という。両者のはたらきの違いは、執着からの熏習には限界があるが、真如からの熏習には限界がない。真如の熏習のはたらきは絶対的であり、平等であるが、同時に衆生の心のあり様に応じて、その現われ方が異なるのである。ゆえにその働きは絶妙なのである。『大乘起信論』は、執着の心も悟りの心ともに、衆生の心の中で「はたらく」ことを具体的に解説している。特に、浄法熏習の構造化は、大拙が空を絶対肯定と見て、そのはたらきを重視することと深く響きあう。すなわち、人思想がしめす超個が個に現われるはたらき、無分別の分別という分別のあらわれかた、靈性としてのはたらきは、浄法熏習のはたらきと呼応するのである。この構造化を感得し、体得したからこそ、大拙は「灰頭土面となり世の中のために働くこと」を主張したと考えられる。大拙の最後の英文著作である *Sengai* にお

いても、『大乘起信論』を解説する短い文章があり、大拙が生涯を通じて『大乘起信論』を重視していたことを物語るエピソードであろう。

西谷啓治における

「近代日本」とニヒリズム

秋 富 克 哉

西谷啓治の戦前の著作『根源的主体性の哲学』や『世界観と国家観』をもとに、その近代理解を踏まえ、そこから「近代日本」理解の立場を明らかにしてみたい。というのも、これらの理解は、戦後のニヒリズムをめぐる議論においても通底し、近代および現代世界の諸問題に対していく時の基礎になつていくと思われるからである。

まず、近代についての洞察という観点から、一九三五年の論考「近代意識と宗教」を取り上げたい。ここで西谷は、近代の特徴を「人間中心主義」さらには「自我中心主義」に認め、近代の人間の内容的空虚の根柢にある「本質的虚無性」を指摘する。もちろん、虚無性が直ちにニヒリズムではない。しかし注目すべきは、本質的虚無性を世紀末的な思想や気分に現れた虚無主義から区別し、近代の人間をより深く規定する現象として受け止めていることである。このような虚無性への洞察は、四〇年代に入るとより明確になる。とりわけ『世界観と国家観』

第6部会

の最終第五章の「国家と宗教」で、精神的な危機への直面のものと心の根柢から現前する虚無性に触れ、神を前にしての絶望という中世的な危機から区別して、近世に特有の危機を「救う神を見失った虚無性」と名づけているところには、虚無性の理解についてのいっそう踏み込んだ姿勢がうかがえるのである。

ところで、欧羅巴近代の危機への洞察が、欧羅巴文明を取り込むことで近代化を遂行した近代日本に跳ね返り、時局の状況と重なって西谷に迫ってきたのは自然なことであつた。西谷の近代日本に対する姿勢を箇条書きの仕方を取り出すなら、第一に、「近代日本」は、世界が初めて真に「世界」として開かれるという世界的必然のなか国家という問題地平で扱われること、第二に、そのような世界性を背景になされる国家論は、国家と個人、国家と世界、個人と世界という複合的関係を含みつつ、同じく世界史的必然として現われた特殊統一的な国家群の問題をも取り込むことになり、その議論は哲学的な一般性を含む一方で現実的具体的な東亜新秩序の問題に向かうものになると、その際西谷は、個人であれ国家ないし国家群であれ民族であれ、世界における主体ないし主体性という立場を強く打ち出すことである。このような主体性への着目は、「根源的主体性」の問題とも繋がって、国家と個人が相互に否定的に媒介されて世界に開かれる根柢に「無の普遍」を求める宗教哲学的立場となり、それが「絶対無」と連関づけられることになる。

さらにこのような方向性は、日本が持ち得る可能性を過去の精神的伝統の中を探る主張となるのであるが、西谷はそれを決して単純に近代欧羅巴の危機に代わる手段の如きものと考えて

いたわけではない。西谷は、現下の日本が明治維新の転換後旧いエトスの退場に代わる新しいエトスを生成させ得ていないことを指摘しつつ、精神的エトスを体現していた実例を江戸時代の儒学者等に求めていく。それは、行と世界直観と宗教的信念が一つに融合していたような立場としてであつた。西谷自身が、否定を媒介とする統一、否定即肯定の可能性を、神仏儒の融合から成る伝統的世界観に認められると見なしていたかぎり、その伝統は、新たな世界の中で未だ可能性を問われたことのないものとして、かつ世界の中で創造的に変化し得るものとして、積極的に取り出されることになったのである。

清沢満之の内観主義

村山保史

清沢満之は精神主義が「内観主義を要義とする」としていう。発表では、この「要義」という表現に含まれる清沢の意図を、「内観主義」という概念の分析を通じて考察する。

清沢は自己省察を「自己の成立如何」にかかわるものと「自己行動の実際如何」にかかわるものの二種に分け、後者を内観とする。前者の自己省察は自己の存在の認識論的（ないし心理学的）な考察にかかわる。後者の自己省察は倫理的な意味合いを帯びた実践的（実行主義的）な概念であり、（1）主観ないし主観の行動原理（主心念）の観察（観察的側面）、（2）行動